

$$[-]$$

つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

日本のフォトジャーナリズム（写真報道）のなかで、吉田ルイ子は二十五年以上にわたり写真をつづけてきました。

「写真には①
力がある」

そう信じて。

だからこそフォトジャーナリスト（報道写真家）は、危険をおかしてでも一枚の写真を撮ることに、全力を傾けることができるのだと思います。

ルイ子が捨てられた孤児たちをとったベトナム戦争では、多くのジャーナリストがあのままの戦場を報道することによって、アメリカ政府が主張した「正義のための戦い」に、ア。とくに写真のはたした役割は重要で、一枚の写真は、千のことばで語るよりも雄弁に事実を伝えたのです。見る人に文字では伝えきれない情報をあたえ、心を揺さぶる、写真にはそんな力があります。ベトナム戦争にかぎらず、写真は社会に大きな影響をおよぼす表現手段ですが、残念ながら日本では、フォトジャーナリストの仕事がイ。とはいえない事情があります。アメリカには「ライフ」や「ルック」という写真雑誌があり、フォトジャーナリストの仕事を正当に評価し、発表する場になっていました。フォトジャーナリズムは、活字のジャーナリズムと同じく、ひとつのジャンル（分野）としてウ。それは、ジャーナリズム科のある大学なら、フォトジャーナリズム科をあわせもっているところが多いという、アメリカの大学のありかたを見てもわかります。

しかし日本では昔から、ジャーナリストという記事を書く人をさし、そのイメージは今もあまり変わっていないのかもしれませんが、映像時代といわれて久しい日本ですが、いまだに新聞など文字による情報を尊重し、写真や映画やテレビといった映像はそれに①
じゅんじるものという意識が社会にひそんでいるように思われるのです。

それは、写真をとる人よりも文を書く人のほうが重視しされるといふ社会習慣につながっていると、ルイ子は指摘てきさします。

「写真がなければ成り立たないようなページでも、ほんのわずかな原稿こうを書いた作家の名前が大きくのり、写真家の名前はすみのほうに小さくそえられる程度ということはよくありますし、新聞社でも、記者が優遇ぐうされているようですよ」

ルイ子はこれから写真をやっている人に、文章も自分で書くことをすすめています。

「とる人と書く人の視点は、けつして同じではありません。とった人の証言がなければ、その写真の記録性は存在しないと私は信じています。だから短い文章でもいい。写真をとる人間が、もつと書く努力をしてほしいと思うんです」

「フォトジャーナリストは、日本ではなかなか報われない仕事です」

ルイ子には、それが残念でなりません。

どんなにすばらしい写真でも、その意義を重んじてのせてくれる雑誌や本がなければ、広く人々に伝えることはできません。また、たとえ掲載けいさいされても、危険をおかしてとったからといって原稿料が高くなるわけではありません。実際は反対で、そういったフォトジャーナリストの写真よりも、広告写真やスキヤンダル（よくないうわさ）を追いかけるカメラマンの写真のほうが、数倍高い値段がつくのが一般的なのです。

写真の力を信じてとりつづけてきたルイ子ですが、

「やめたいと思ったことなんて、何度となくあります」

②とうちあけます。なによりもつらかったのは、南アフリカのアパルトヘイト（人種を差別する政策）をレポートしたときでした。南アにとうししている日本企業が、「写真をのせるなら、その雑誌にはもう広告は出しませんよ」と、ルイ子が発表しようとする雑誌に（a）.....をかけてきたのです。日本企業にとっては、ひどい人権侵害が当たり前のこととしておこなわれている南アに、とうししていること自体がイメージダウンになるし、報道されることによって、アパルトヘイトをおこなっていた当時の南ア政府との関係が、悪くなることをおそれたのでしょう。

しかし、そんなルイ子をはげまして『南ア・アパルトヘイト共和国』を出版にこぎつけさせたのは、危険を承知のうえで協力してくれた南アのふつうの人々の存在だったといえます。

さまざまな障害にぶつかっても、なお、とりつづけてきたルイ子です。その ^① は、いったいどこにあるのでしょうか。

「それは、出会い^{あかし}です。とりたいと思う人と出会う喜びは、かけがえのないものです。出会いは生きていることの証だと思う。その喜びを映像で表現できてよかったと、私は思っています。写真は自分の生き方の表現です」

今、多くの女性たちがカメラをもつようになりました。

時代は変わりはじめているのです。女性が自己表現の手段としてカメラをもつ、そこにルイ子は新しい可能性の芽を見いだしています。彼女はそんな女性たちに、③ みがまえることなく好きなものにレンズを向けることをすすめます。

「まず、いちばん興味のあるもの、いちばん身近にあるものをとればいいんじゃないかしら。家族でも、ネコでも花でもいいの。カメ

ラをとおして見るうちに、なんとなくがめていたものでも視点が変わっていくと思います。どんなふうにとりたいか考えるようになる、それが「写真をとる」出発点なんです」

黒人の女の子をとったことがきっかけで、ハーレムの人たちをとりはじめ、すると黒人を取りまく差別に目が向くようになり、そこから世界各地の人々に関心を寄せるようになっていったルイ子。出会いがまた新しい出会いをよび、自分自身のテーマが浮かびあがっていったのです。

そんなふうにして、なにげなくまかれたひと粒の種子から、しだいに広がっていくものではないでしょうか。とりつづけていくなかで、表現したいイメージどおりにとるためにはどうしたらいいのかわからない試すうちに、テクニクや表現方法は磨かれていくのですし、また、写真をとることによって出会った人たちから人の輪が広がり、興味や関心のはばも大きくなっていくはずで

好きなものしかとらない、とりたいものしかとらないのは、長くつづける秘訣かもしれません。

フォトグラファー（写真家）はなにかに感情がつきうごかされたときに、カメラを向けます。当然、怒りによってシャッターを押すこともあるでしょう。しかしルイ子は、怒りでとることはさけてきました。もし万が一、怒りが動機となつてとることになったとしても、直接的に表現することはないと断言します。

B たとえ悲惨な状況であろうとも、そのなかにひとすじの光を見いだすのが彼女のスタイルであり、それをルイ子は「反語の写真」といいます。たとえば、アパルトヘイトにたいして、強い怒りを感じます。「どうして、こんなに一生懸命生きている人たちを殺すの」という怒りです。それでも、警官が黒人をなぐり殺すところはとりません。そのかわりに、子どもたちの訴える瞳で、こんなにも美しくかわいらしい者にたいしてふるわれる暴力、将来に望みのもてない暮らしへの怒りを伝えるのです。その姿を見れば、なぜ差別があるのかと人は問うものだからです。貧困という問題を扱うときも同じです。おなかのふくれた栄養失調の子どもはとらずに、貧しくて家族そろって食事を分けあう、安らぎのひとつをとりたいたいのです。

「貧しさや苦しさそのものをとる人もいますが、それを私は否定しません。それは個性ですから。でも、私はとりたくないの。それではプロではないといわれても。私は最後の瞬間まで人間の尊厳や誇りを信じていたんです。そういう誇りある人間が好きなんです」
今ルイ子は、新しいテーマに取り組んでいます。それは、年輪を重ね、さらに美しく生きる日本の女性たちを、二十世紀の歴史としてとること。

ルイ子はかつて、晩年の市川房枝（婦人運動家・政治家）をとったことがありました。女性解放のために半世紀をついやした元国會議員の顔には、無数の深いしわがぎざまわっていました。写真をとりながら、それがとても美しいしわであることにうたれていました。

「若いころには興味をもたなかったテーマで、とれなかったかもしれない。でもいまは、私もこんなふうにな年をとっていききたいという気持ちもあつて、ひかれるのかもしれないね」

D ルイ子にとって写真はどのようなものでしょうか。

彼女は、こんなふうに答えました。

つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

中学一年生の私は、長屋に住む遊び仲間が羨ましかった。二階の窓から通りを見下ろしたり、たがいに窓から窓へ声をかけ合っているようすが、いかにも楽しげだったからだ。長屋の裏に行くと、井戸端で仲間の母親や祖母などが愉快そうに話をしたり、弟や妹がやかましく言い争いをしている。そのにぎやかな活気が、私には珍しかった。

夕方になると、一緒に遊んでいた仲間たちが門のところに集まり、しばらくのあいだ立ち話に興じる。中学三年生の三人を中心に、二年生と一年生が一人ずつ、それに小学六年生が一人。合せて六人が、夕暮れの通りを前にして、学校であったことや翌日の遊びの計画などを思い思いにしゃべる。指相撲や手拭い取りなどをすることもある。

兄や弟のいない私は、この時間がことのほか楽しかった。すきつ腹を抱えながらも、仲間たちと別れて帰宅するのが辛かった。たまに何かの都合で、仲間たちが早々と家へ帰ってしまったときなどは、一人で門の隣にある畳屋を覗くことにしていた。店のなかで、五十年配の父親と二十歳前後の息子が作業をしていた。

息子の幸平さんは中学を出るとすぐ父親について畳職の道に入ったそうで、中肉中背の体つきだが、両腕の太さが大人の脚ぐらいあった。ことに上腕がたくましく、畳の上に肘をついて麻糸を引くときには、信じがたいほど大きな力瘤がふくれ上がった。

父と息子は口数も少なく、一日じゅう黙々と仕事をしている。ときどき父親が呻くような声を発すると、息子は素早く畳針に麻糸を通したり、畳表を運んできたり、口に含んだ水を表に吹きかけたりする。たがいの動きが、暗黙のうちに通じ合っているようすだった。

ときどき店内から通りへ出てきて一休みするときには、私たちは尊敬にみちた目で、その筋肉を見つめる。何か用を頼まれはしまいかと期待している。

その幸平さんが、あるとき私へ向かって、寡黙(口数の少ないこと)な口をひらいた。

「おめの家サ雑誌や本があるべ」

声をかけられて、私はどきまぎした。仲間はみんな驚いて見守っている。

「うん、あるよ」

「貸してくれねえかな」とつぜんのことに、私は戸惑った。

当時、地方では本や雑誌は容易に手に入らなかった。わが家で毎月とっているのは、私の「少年倶楽部」と母の「婦人倶楽部」と姉の「ひまわり」だった。

幸平さんが頼んでいるのに、ちゃんと応えねえかと仲間たちは私の脇腹を小突く。

「うん、……ええよ」と、私は答えた。幸平さんが仕事の合間にでも読むのだろうと思っていた。翌日、私は「少年倶楽部」と数冊の本を持ちだした。

「すまねえな。二、三日貸してけろや」幸平さんは嬉しそうだった。

言葉どおり三日後には返してよこして、

「もっとねえかな。……女の読む雑誌のほうがあええんだがな」と、.....しながら頼むのだった。

そのとき初めて、読むのは幸平さん自身でないと分かった。しかし、畳屋には母親のほかに女つけはなさそうだった。不審に思っ、仲間聞いてみた。

「そりゃあ、ユキちゃんだべ」

みんなが顔を見合わせていった。

幸平さんの妹だという。十六歳になるが、長いこと病気で二階に寝ているのだそうだった。この半年のあいだ、すぐそばの窓のなかに病人がいることなど、私はまったく気づかなかった。そういえば、ときおり、かすかな咳を聞いたことがあるような気はした。

「ユキちゃんは肺病なんだべ」小学六年生の子がささやくと、その兄の中学三年生がいきなり拳固で頭を殴った。

「黙ってろ、ばか」

2

店のなかでは、幸平さんが私たちに目もくれず、黙々と畳表を張っていた。

ユキちゃんは中学校へ上がって間もなく発病し、しばらくは隣の療養所に入っていたのだという。所内に学校と同じような勉強をする施設があり、ユキちゃんも一時はそこで授業を受けていたようだ。病状が落ち着くと、自宅療養に切り換え、それきり一人で二階に寝ていた。

私は一度も見たことのないユキちゃんを、いろいろに想像してみた。——幸平さんの顔だちが整っているから、きっと彼女も美しいにちがいない。名前のとおり雪のように白い肌をしているのかもしれない。

仲間たちに聞くと、もう三年もユキちゃんを見たことがないそうだった。小学六年生の子などは、顔もおぼえていないらしい。

「まるい顔した笑い上戸だったべ」と、中学三年生たちは懐かしそうにいう。

「ほんだ。大きな目を細くしてさ、いつもコロコロ笑ってばかりいたな」
門のところで話しているのを、すぐそばの二階に寝ているユキちゃんは聞いていたかもしれない。しかし、コロコロと笑う声など、一度も聞こえてきたことはない。

ユキちゃんは小学生のころ、運動会でいつも一等賞をとっていた。リレーでは味方がかなり引き離されていても、ユキちゃんが走りだすと挽回できた。前を走っている選手をすいすい追い抜いていくユキちゃんは、ほればれとするほど格好よかった。——顔を斜めに傾げ、おかっぱ髪をなびかせて、まるで進駐軍のジープみたいにく走りつと、三年生たちは口をそろえていった。ユキちゃんが発病したとき、すぐに幸平さんは裏庭で鶏を飼いはじめ、毎朝かならず産みだての卵を療養所へ届けに行った。自転車でも三十分以上はかかる道のりを、ランニングして通っていたそうだ。

「卵を産まねえときは、幸平さん、じっと鶏小屋の前で待ってたもんな。いまでも朝早く小屋のそばにしゃがんでることがあるぜ」
みんなは笑ったが、私には胸の締めつけられるような話だった。

幸平さんに頼まれて三度ほど雑誌を貸したが、ある日、「ひまわり」を持ちだそうとしているところを姉に見つかった。

「どこに持っていくのよ」

「ちっとだけ、見せるだけだよ」

「いやよ。あたしの大事な雑誌を持っていけないでよ。……ねえ、お母さん。あたしの雑誌を黙って持ちだそうしてるの。ねえ、どうにかしてよ」

争っているところへ母があらわれて、私から「ひまわり」を取り上げた。

「あんた、これをどこに持っていこうとしたの。そういえば、このごろ、ときどき本を持ちだしていたみたいね」

「貸してくれて頼まれたんだもの」

「誰に頼まれたの」

「畳屋の幸平さんだよ。……二階に寝てるユキちゃんサ読ませたいんだと」

「ユキちゃんって畳屋さんの娘さん」

「そうだよ。病気で寝てるんだって」

何も知らない私は、ありのままを話した。母の顔色が**⑥**……じたのにも気づかなかった。

「いままで持ちだしたのも、そうなの」

「うん、そうだよ」

「それを、全部ここに持ってきてきなさい」母は表情を硬くして命じた。

私はびつくりして、貸した雑誌や本を持ってきた。母は、すぐにそれらを持って風呂場へ向かった。姉が不安そうについていった。私も、そつとくつついていくと、焚きつけ口の前にしゃがみ込んだ母が手荒く雑誌を引き破った。姉が驚きの声を洩らした。破かれた雑誌や本は、つぎつぎに風呂釜の炎のなかへ投げられた。そのたびに母の顔面が真っ赤に染まった。

「どうしてよう、あたしの本まで」姉が気を取り直したらしく叫んだ。

しかし、母は黙ったまま作業をつづけた。口を閉ざしていたのは、息をとめていたためらしい。

「もう二度と貸してはいけませんよ」

燃やし終えた母が顔をこわばらせたまま、厳しく命じた。そのあと顔と手を石鹸だらけにして神経質に洗っていた。私も手を洗わせられ、ついでの嗽まで強いられた。

「畳屋さんの娘さんは肺結核で、だいぶ重いらしいの。ついこのあいだ、お隣の奥さんに注意されたばかりなのよ」

私が畳屋の付近で遊んでいるのを見とがめて、感染の恐れがあると母に告げたらしい。母としては近所で遊ぶぐらいなら心配には及ばないと判断したのだろう。

しかし、患者の手に触れた雑誌や本をそのまま家のなかに放つてはおけなかった。当時としては、この母の処置はあたりまえだったというべきだろう。

その後、いくら幸平さんに頼まれても、

「もう家には雑誌も本もねえんだ」と、言い逃れるほかなかった。

そのうち、幸平さんもあきらめたらしく、声をかけてくることはなくなった。書店主が表通りを自転車に乗って配達に来るのを、幸平さんが見ていないはずもない。おそらく貸さなくなった事情を、彼は**⑦**……したのだろう。

それから一年ほどして、ユキちゃんは亡くなった。流行性感冒（インフルエンザ）に罹ったのが直接の原因だと、仲間たちは話していた。畳屋の店先に黒白の幕が張られ、ささやかな葬儀が執り行われた。ユキちゃんの棺を見送るために、長屋じゅうの人びとが表通りにならんだ。いつになく神妙（みよた）（おとなしくしこまること）な面持ちの仲間たちと一緒に、私も道路脇にたたずんだ。

3

おかしなことだが、そのときの私の脳裏には、勝手にこしらえたユキちゃんの面影が揺らいでいたのである。

白木の棺は父親と兄の手で運びだされた。棺を抱えた幸平さんの腕には、例の力瘤は盛り上がっていないかった。それほどユキちゃんは軽くなっていたのだろう。

ユキちゃんの遺影はなかった。当時は、どの家庭にもカメラのある時代ではなく、写真館へ赴いて撮ってもらうことも、めつたになかった。長く病床にあったユキちゃんの場合、もし写真があったとすれば、それは運動会のために一等賞をとっていたころの、まろい笑顔であつたにちがいない。

幸平さんは目を真っ赤にしていた。いつものように黙然として妹の棺を荷車に乗せ、自ら牽いて城山の麓にある火葬場へ向かった。あとから両親と親戚たちがついていった。

「おれたちも送っていくべ」

仲間の一人が言いだして、私たちは葬列のあとに従った。石ころの多い道で荷車が弾むたびに、私はユキちゃんが揺り動かされているように目に浮かべた。白い肌を傷つけられるのではないかと心配した。

火葬場まで行くと、仲間たちは足をとめ、そつと後ずさりして葬列から離れた。

4

……あとは我勝ちに駆けだし、八幡小路へと一気に逃げ帰った。走りながら、私は幻を見ていた。一人の女の子が後ろから駆けてきて、風のように私たちを追い抜いていった。

葬儀の日から一週間ほどたつて、本棚のなかから一冊の本を見いだした。ずいぶん前に姉からもらった「小公女」だった。

私は思わず息をとめた。それを幸平さんに貸したことを思いだしたのだ。母に命じられたとき、うっかり見落としたようだ。

ユキちゃんの手が触れた本である。おそろおそろ本棚から抜きだして、両手にとった。かすかに葉の匂いがただよっているような気がした。本をひろげたユキちゃんは何度か咳もしたにちがいない。しかし、母にならって風呂の焚きつけ口へ持つていく気にはならなかった。

どうしようかと迷った。こつそり川へ流してこようと思ったが、なんとなく未練もあった。両手に持つて眺めているうちに、ふと背表紙に近いところに赤いものが見えた。ほんの一センチほど出ているのは細い糸だった。頁の終いに挟んである。どう見ても、たまたま挟み込まれたのではなく、葉がわりにしたものと思われた。

引きだしてみると、少し縫いの戻った絹糸だった。だが、姉にも私自身にも、このようなことをする習慣はない。

そう考えてから、はつとした。ユキちゃんの忘れものだと直感したのだ。

病床のそばにある羽織が何から、糸を一本引き抜いて葉にしていたのではないか。最後に返してよこしたとき、それを挟んだままになつてしまったのだ。
B つややかな光沢を持つ絹糸を指先で触ったあと、私は頁のあいだへ戻した。

第一回 国語科問題

〔一〕 (一) ①に入るふさわしいことばを六字（漢字とひらがな）で考えて書きなさい。

(二) アーウに入る最もふさわしいことばを、つぎの1～4から選び番号で書きなさい。

- | | | | | |
|---|--------------------------------|----------------------------------|--------------|---------------------------------|
| ア | 1 反響 <small>きよう</small> を呼びました | 2 賛同 <small>さんどう</small> を得ました | 3 疑問を投げかけました | 4 拍車 <small>はくしゃ</small> を掛けました |
| イ | 1 下火 <small>げか</small> におちいった | 2 脚光 <small>きゃくわう</small> をあびてきた | 3 常識に欠けていた | 4 権威 <small>けんい</small> をふるってきた |
| ウ | 1 疑問が生じています | 2 評価が定まっています | 3 結果をまねいています | 4 可能性を広げています |

(三) ①、②に入るふさわしいことばを考えて、マス目に合うように二字または三字の熟語を書きなさい。

(四) ジャーナリズムに対して日本はアメリカと比べてどんな風潮が強いのですか。ふさわしい部分を二十五字以内で探し、はじめと終わりの五字を書きなさい。句読点もふくみます。

(五) 線Aとありますが、なぜ報はつられないのですか。その理由を二つ書きなさい。

(六) 線Bとありますが、この文についてつぎの問いに答えなさい。

① ルイ子のとった「反語の写真」とは具体的にどのような写真ですか。二つ書きなさい。

② なぜ「反語の写真」をとるのですか。ルイ子の考えを一文で探し、はじめの五字を書きなさい。

(七) 線Cとありますが、このように感じたのはなぜですか。自分のことばで書きなさい。

(八) 線Dとありますが、吉田ルイ子にとって写真とはどのようなものだと思いますか。ルイ子が答えた内容を想像し、文章全体から考えて自分のことばで書きなさい。

(九) ①～④を漢字に直しなさい。必要なら送りがなも書きなさい。

〔二〕 (一) 1～4にはつぎのアーエのどの文が入りますか、記号で書きなさい。

- ア しんと静まり返った空気に怯おそえたのだ。
イ みんなは口を閉ざして二階の窓を見上げた。
ウ 一度も会ったことがないのに、悲しくてならなかった。
エ 幸平さんは、私や仲間たちにとって憧あこがれの存在だった。

(二) ①～④に入る最もふさわしい二字の熟語をつぎの1～7から選び、番号で書きなさい。

- | | | | | | | |
|------|-------------------------|------|------|------------------------|------|------|
| 1 察知 | 2 拒絶 <small>きょつ</small> | 3 変化 | 4 疑問 | 5 遠慮 <small>りょ</small> | 6 安心 | 7 油断 |
|------|-------------------------|------|------|------------------------|------|------|

(三) 線Aとありますが、このときの「私」の気持ちを二つの点から考えて、それぞれ自分のことばで書きなさい。

(四) 線Bとありますが、なぜ「私」はそうしたのですか。「ユキちゃん」に対する「私」の気持ちを文章全体から考えて、自分のことばで書きなさい。

110111

[illegible]